

# 和歌山県医療審議会の議事内容

(日時) 令和6年10月25日(金) 14:00~14:50

(場所) 和歌山県民文化会館 3階 特設会議室

[ 開会・挨拶 ]

《 事務局(福祉保健部 雑賀技監) 》

(福祉保健部 雑賀技監から開会挨拶)

[ 議題(1) 那賀保健医療圏における病床整備について ]

《 事務局(医事調整班 小守主査、医療戦略推進班 近田主査) 》

(資料1に基づき説明)

《 平石 英三 会長 》

ただ今、事務局から那賀保健医療圏における病床整備について説明があった。何かご質問やご意見等はあるか。

《 中井 國雄 副会長 》

確認もかねての質問であるが、富田病院と名手病院の機能ごとの病床数のデータはどうか。那賀保健医療圏では急性期病床は過剰であるが、そこからの転換も検討したのか。

《 事務局(医療戦略推進班 近田主査) 》

富田病院は、回復期が47床、慢性期が54床、急性期はなし。名手病院は、回復期104床のみ。

《 平石 英三 会長 》

ほかにご質問やご意見等はあるか。

(特に発言なし)

では、当審議会として「適当である」との答申を行うことに異議はないか。

(異議なしの声)

ご異議がないようなので、本日付で県知事あて答申することとする。

[ 議題(2) 県知事の許可を要しない周産期医療に係る病床の設置について ]

《 事務局(医事調整班 中山主事、地域医療班 藏光主任) 》

(資料2に基づき説明)

《 平石 英三 会長 》

ただ今、事務局から県知事の許可を要しない周産期医療に係る病床の設置について説明があった。何かご質問やご意見等はあるか。

《 尾崎 文教 委員 》

橋本医療圏において、橋本市民病院では医師数4名に対し分娩数が175、一方奥村マタニティクリニックでは医師数1名に対し分娩数が390となっており、マンパワーの問題からかなりアンバランスであると思う。各医療圏における事情もあると思うが、他の医療圏では医師数に応じた分娩数になっているので、そのあたりの是正をはかってはどうか。

《 事務局（地域医療班 藏光主任） 》

分娩数が偏っていることは認識している。一定のリスクのある分娩は橋本市民病院で、一般的な分娩は奥村マタニティで対応するといったようなすみわけもできているようであるので、状況を確認しながらではあるが今後意識していきたい。

《 平石 英三 会長 》

奥村マタニティクリニックでも医師1人ですべて対応しているわけではなく、非常勤医師等もいるのではないか。

《 事務局（地域医療班 藏光主任） 》

資料中の医師数データはあくまでも分娩取扱常勤医師数であり、非常勤医師も含めると7名で対応している。

《 平石 英三 会長 》

ほかにご質問やご意見等はあるか。

(特に発言なし)

では、当審議会として「適当である」との答申を行うことに異議はないか。

(異議なしの声)

ご異議がないようなので、本日付で県知事あて答申することとする。

[ その他 ]

《 平石 英三 会長 》

全体を通じてでも良いが、各委員から何か発言はあるか。

《 岩崎 伊佐子 委員 》

私は海南市から来ているが、しこねクリニックでは分娩の取り扱いをやめてしまい、いくこレディースクリニックも閉院してしまった。海南医療センターにも婦人科はあるが産科はない。すべて和歌山市まで行く必要があるので、助けていただきたいと思っている。

《 平石 英三 会長 》

海南市も和歌山医療圏に含まれているところであるが、海南市での分娩取扱施設の要望ということ。

《 事務局（石田 医務課長） 》

出生数も減少傾向にあり、なかなか産科医の確保も困難である中、周産期医療圏を和歌山・那賀・有田で一つとするよう見直した。海南医療センターに産科を復活させるとしても、産科医を1名配置すればいいというものではなく、24時間体制のためにはおおむね3名の産科医が必要になる。海南市は医大や日赤が近いという地理的条件にある中、医大から海南医療センターに産科医を3名派遣するというのは現実的ではない。地元で産科があった方がよいというご意見はごもっともであるが、このような状況を踏まえると難しいものであるということをご理解いただきたい。

《 岩崎 伊佐子 委員 》

海南市が和歌山医療圏の中に入っていることもこれまで何回も説明を受けていたのでわかってはいたが、機会があるごとに声を上げておきたかったため、言わせていただいたものである。

《 平石 英三 会長 》

医療機関がある程度身近にあった方がよいというご意見はごもっともで理解できるが、紀南の方はもっと医師が少ない状況でもあるので、今後医師が増えてくれば状況が変わってくるかもしれない。

《 安藤 恵理 委員 》

岩崎委員の意見に関連して、県立医科大学でも産科に特化して学生の募集をされているが、まだ卒業の段階ではないと聞いている。今後きちんと計画を立て、どこにどれだけの医師が必要かというのを早くから検討していただければよいと思う。

もう一つ質問・意見であるが、議題1の病床整備について、田辺医療圏でも整備が可能であったが事前協議がなかったと先ほど説明があった。今後効率的で質の高い医療提供体制を目指すのであれば、こちらから「病床を増やしてはどうか」というような提案をするのはいかがか。田辺医療圏はかなり病床数が不足しているようにみえる。

《 事務局（医事調整班 小守主査） 》

田辺医療圏では193床基準病床数を下回っている。基準病床数制度は、過不足を表すものではなく、整備できる上限を定めたもの。193床整備できるからといって、病床が不足しているというのではないというふうにご理解いただければ。

《 中井 國雄 副会長 》

田辺医療圏の現状を申し上げますと、実際には193床以上の空床がある状況。病床が不足して入院できない人がいるといったような状況ではない。また、増床するとなると人員確保のための費用等を病院に強いることになるため、こちらから奨励するとなるとなかなか難しい話で、簡単ではない。

《 安藤 恵理 委員 》

先ほど議題1で、申請が早い者勝ちになる恐れがあると説明されたので、不足しているのかと気になって質問したものである。医療圏ごとに状況が異なるということで理解した。

《 平石 英三 会長 》

安藤委員からの県立医科大学の産科枠に関する一つ目の質問について、中尾委員から何か意見はあるか。

《 中尾 直之 委員 》

昨年度から県民医療枠に産科枠を設けているところであるが、まだ卒業の段階ではないというのと、卒業してからも地域で活躍できるようになるまでに一定の経験を積む必要があり、もう少しばかり時間が必要。医務課長の発言のとおり、分娩数等に応じて周産期医療圏を見直したところであり、人材が限られている中、海南は和歌山医療圏の枠組みの中であるということで、産科医の配置を考えていくことになる。地元で出産したいという気持ちは大いに理解できるので、できるだけご期待に沿えるよう尽力する。

《 日裏 勝己 委員 》

基準病床数について、田辺医療圏では193床不足しているということであるが、基準病床数とはどのように算定されるものか。

《 事務局（医事調整班 小守主査） 》

基準病床数の算定方法は厚生労働省令で定められており、全国一律である。算定式の特性上、高齢者人口が多いと基準病床数が多くなるため、田辺医療圏は基準病床数が多くなったと考えられる。

《 平石 英三 会長 》

基準病床数の算定は複雑で色んな係数が関係しており、一言で説明するのが難しい。

《 日裏 勝己 委員 》

算定された基準病床数が本当に実情に応じた数字であるのか。御坊医療圏ではあまり病床が余っているようには感じない。

《 平石 英三 会長 》

病床数としてはだいたい想定の範囲内におさまってきたところであるが、地域医療構想側からみると、後期高齢者が増えていく中、今後は4つの病床機能区分をどうしていくかが課題。2040年に向けた地域医療構想の中で議論されていくことになる。

《 山田 陽一 委員 》

海南医療センターでの分娩取りやめについては、医師を確保できなかったのが一番大きな原因である。やはり産科医が不足しているため、この際分娩数に合わせた医療圏の再度の見直しが必要ではないか。その上で各医療圏に産科医を適切に配置するための計画を再度立てる必要があるのではないか。

《 事務局（石田 医務課長） 》

将来的には分娩取扱施設を拠点化するなど、今の周産期医療圏を大きく見直すことを考えていかなければならない。田辺・新宮を南の拠点としたときに、そこに確実に複数の産科医を派遣する仕組みを作る必要がある。難しいような気もするが、そういう体制を組んでいかなければいけない時期が来る。できるだけ県内で産科医の確保ができるように、当然県立医大とも連携している。

《 平石 英三 会長 》

地域の医師の偏在については、国や日本医師会でも議論されており、今後の大きな課題である。本日は、皆様から貴重な意見をいただいた。進行を事務局にお返しする。

[ 閉会・挨拶 ]

《 事務局（福祉保健部 雑賀技監） 》

（福祉保健部 雑賀技監から閉会挨拶）